様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０２０８

研究課題名（和文）アイヌ口承文学的解釈学の創出

研究課題名（英文）Hermeneutics of Ainu Oral Lieterature

研究代表者
坂田　美奈子（Sakata, Minako）

東京大学・総合文化研究科・教務補佐員

研究者番号：３０５７３１０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：　アイヌ口承文学を内在的に読み解く方法を立ち上げる試みとして、再帰的モチーフを抽出し、モチーフ相関図を作成した。これによって特定の物語を解釈したり、モチーフ概念を検討したりする際に参照すべき物語のネットワークが可視化される。具体的事例として村の滅亡／再生テーマの物語群を分析した。村の滅亡原因は嫉妬、夜襲、疱瘡の三類型がある。この三つのモチーフ間の概念的な関係や、三つのそれぞれが他のどのようなモチーフ群と隣接関係があるかを分析することにより、個々のモチーフの概念やテーマの示唆する意味が浮かび上がる。このような作業の積み重ねにより、アイヌ口承文学のテクスト分析が可能になるだろう。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project is to create a methodology to read Ainu oral literature. For this purpose, I picked up recurrent motifs and themes and made a motif map, so that we can see a network of stories which we should refer to when reading a certain story or conceiving notions of motifs. As an example, I analyzed stories of village regeneration. A protagonist of those stories is an orphan who regenerates parents' village which once died out. There are three patterns in reasons of village extinction; night attack, jealousy and small pox. Analyzing the relations between those three motifs, or relations with other motifs, meaning of three motifs or village regeneration theme emerges. By this methodology, text analysis of Ainu oral literature based on its own context will become possible.

研究分野：口承文学研究

キーワード：アイヌ　口承文学　エスノヒストリー　歴史認識

１．研究開始当初の背景

(1)　アイヌ口承文学は明治期末から 1980 年代末までの間、アイヌ語研究者やアイヌの伝承者自身による膨大な筆録・音声録音資料が残されている。先住民語で残された口頭伝承の資料としては、世界的にみても、量質ともに極めて貴重な資料群であるにもかかわらず、日本におけるアイヌ口承文学研究は、多くがジャンル分類や、活字化・翻訳に止まるものが大半であり、物語内容に踏み込んだ研究の蓄積が極めて乏しいという現状があった。

(2)　口承文学研究において、形式や構造の研究に関心が偏り、文字で書かれた文学に対する文学批評のようなテクスト内容の分析を行う研究が乏しいという実情は、大なり小なり世界的な傾向でもあり、口承文学研究の課題として意識されてもいた。その中で Foley（1991）は旧ユーゴスラヴィア（現ボスニア・ヘルツェゴヴィナ）に伝わる口承の叙事詩、ホメロスの叙事詩、ベオウルフの比較研究などを通して、モチーフ、話型、慣用句といった、口承文学の形式的な要素が同時に意味の単位でもあり、語り手から聴き手に意味を伝達する際のサインとして機能することを明らかにして、口承文学の美学的な解釈を可能にする道筋をつけた。

２．研究の目的

以上のようなフォーリーの研究を受け、アイヌ口承文学において再帰的に現れるモチーフ、話型、慣用句などもまた、単なる形式的な決まり事なのではなく、意味の単位として機能しているのではないか。個々のモチーフが持つ概念を明らかにすることで、従来読み取ることのできなかったメッセージをアイヌ口承文学から読み取ることが出来るのではないか、と仮定し、アイヌ口承文学における頻出モチーフの意味を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

(1)　これまで翻訳・刊行されてきたアイヌ口承文学および、未発表の物語が多い金成マツ筆録の散文説話（北海道立図書館所蔵マイクロフィルム）などから再帰的に現れるモチーフを抽出し、エクセル表にまとめ、モチーフ相関図を作成する、という方法をとった。ジャンルを超えて共有されるモチーフも多いことから、分析対象は特定のジャンルに絞り込むことは原則としてしない。

この相関図の作成によって、同一モチーフを共有する物語群を容易にフィルターで抽出することが可能になり、それによって特定のモチーフがどのようなモチーフと同時に現れるのか、どのような話型と結びつくのか、結びつかないのか、といったモチーフ間関係、モチーフ-話型関係が可視化される。

以上の手順によって、特定のモチーフの意味を明らかにするために比較分析の対象とすべき物語群の範囲が特定されるので、それら個々の物語におけるモチーフの現れ方を比較分析し、モチーフが指示する意味の振幅やニュアンスを検討する。

(2)　しかしながら、膨大なアイヌ口承文学の資料のすべてについて、研究期間内に網羅的なモチーフ・マップを作成することは困難であったため、サンプル的にいくつかの再帰的モチーフに焦点を定め、モチーフ間関係、モチーフ‐話型関係の分析から、具体的にどのようにアイヌ口承文学を読むことができるのか、実践してみた。

４．研究成果

(1)　村の滅亡／再生の物語

村の滅亡／再生というテーマは散文説話で数多くみられるテーマだが、神謡や英雄叙事詩にも現れる。このテーマは、アイヌの祖神アイヌラックルが人間の世の始まりを開く決意をする「子持刀」（金田一 1993：212-224）という神謡に最もシンプルな形で現れており、アイヌ口承文学の根源的テーマのひとつと考えてよいだろう。

このテーマを持つ物語は、孤児の主人公が成長し、素性が明かされ、その昔、両親の村がなんらかの理由で滅びたことを知らされ、村を再興して締めくくられる。この物語群において、アイヌの村を滅ぼす原因は三つある。嫉妬、トパットゥミ（夜襲）、疱瘡である。以上三つのモチーフは一見、表面的には無関係にみえるが、同じテーマを共有していることからなんらかの意味的な隣接性があると推定される。それぞれのモチーフ間関係を個々にみていくと以下のようになる。

(2)　トパットゥミ

嫉妬とトパットゥミの共通点は、富もしくは富を持つ個人の能力への嫉妬から人間が人間を殺害するという性格で、因果関係にある（沢井トメノ「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」『北海学園大学学園論集』88：124-286、1996。盤木アシンナン「wenkur ekasi newa huci upaekoyki」知里真志保遺稿ノート、北海道立図書館蔵マイクロフィルムなど）。一方、トパットゥミと疱瘡の共通点は、理不尽に村全体を皆殺しにするという性格で、互いに隠喩的関係にある。杉村キナラプク「ペッキタイの村長の次男の話」（アイヌ無形文化伝承保存会 1983：29-66）では、とある村が他村によるトパットゥミによって滅ぼされるが、トパットゥミを行った側の村人たちは、件の村が疱瘡で滅びたと偽る。平目カレピア「疱瘡神に助けられた少年」（久保寺 1977：168-171）の主人公は、かつて疱瘡で滅びた村の生き残りの少年なのだが、ある日彼の前に疱瘡神が現れ、かつて両親の村に「夜討ち（トパットゥミ）をかけて、お前の父も村人も一緒にみな殺しにしてしまっ

た」と告げる 。ここでは、疱瘡神が疱瘡を流行させることを「トパットゥミをしかける」と表現している。

(3)　嫉妬

次に嫉妬モチーフの特徴をみてみると、嫉妬するのは人間か悪神・化け物であることになっている。そのうち人間の嫉妬はトパットゥミ、殺人モチーフおよび村の滅亡／再生モチーフと接続するが、化け物・悪神の人間に対する嫉妬は、飢饉、婦女子誘拐モチーフに接続し、化物退治のテーマに接続して、村の滅亡／再生モチーフとは接続しない。

(4)　疱瘡

疱瘡とトパットゥミが隠喩的関係にあることは既にみたが、疱瘡とトパットゥミには重要な相違点がある。それは疱瘡が、疱瘡神が引き起こす病であって、神と人間の関係の問題である、という点である。それは、疱瘡モチーフが嫉妬モチーフとは直接結びつかないという点からも指摘できる。嫉妬は先に見たとおり、人間か悪神・化け物の性質であるが、アイヌ口承文学における疱瘡神は決して悪神ではなく、むしろ重い神であって、アイヌラックルの父神であるという伝承もある。

(5)　疱瘡概念の特異性

アイヌ口承文学において、原則的に神は人間を滅ぼさない。神は人間の役に立ってこそ神とされるのであって、人間に危害を及ぼしたり、人間を殺したりするものは悪神や魔物なのである。しかしながら、悪神や魔物は、滅亡／再生テーマには接続せず、化物退治のテーマに接続するのであり、従って、人間を滅ぼすほどの力を持っておらず、人間や神々によって退治されてしまう存在として位置づけられている。疱瘡神は唯一、人間を滅ぼし得る神であって、先に指摘した疱瘡神の神としての位置づけの高さは、おそらくこの故である。この意味でアイヌ口承文学は、疱瘡を極めて特異な存在として位置づけているといえる。村の滅亡／再生テーマとのかかわりからみるならば、疱瘡は神と人間の関係の問題でありながら、嫉妬‐トパットゥミと接続することによって、人間の人間に対する害悪と同様の性格を負わされてもいる。以上のように、疱瘡は、一方で神と人間の問題として表象されながら、人間的な悪の性質を暗に付加されており、疱瘡の概念はトパットゥミや嫉妬ほど単純ではなく、極めて両義的である。

(6)　疱瘡と飢饉

疱瘡モチーフは飢饉モチーフとも隣接性をもっている。疱瘡の位置づけについて、さらに検討するために、飢饉モチーフとの関係性を見てみたい。平賀エテノア「アエオイナの神の自叙」(久保寺 1977：543-546)、ワテケ「ヨシキリ」(田村すず子編：2001：87-110)は、ほぼ同内容の神謡であるが、これによるとアイヌの人文神が魔神たちを退治した際、退治を免れて逃げ去ったのが疱瘡神と飢饉の神であるという。

(7)　飢饉の概念化

飢饉を惹き起こす原因とされているのは、悪神や化け物で、しばしば人間の村の繁栄に嫉妬して食べ物を隠してしまったためとか、化け物が村長の息子の美貌と勇気と雄弁に嫉妬し、殺そうとしたがかなわないため、飢饉を起したとされることもある。久保寺逸彦は、飢饉魔は大アメマスで、これが地震を起こし、山崩れ、山津波を起すので魚が川を上らなくなって飢饉がおこると考えられていたと説明している（久保寺 1977：719)。この他、人間の獲物や食べ物の扱いについてのマナーの悪さに神々が腹を立てて、食べ物を隠してしまったという神謡は多数残っている。飢饉は、神や魔物の人間に対する嫉妬、飢饉魔の仕業、人間のマナーの悪さなど、神々と人間の関係の上に起る問題として概念化されていることがわかる。つまり自然災害の範疇にあるものとして認識されている。

飢饉モチーフの特徴として興味深いのは、飢饉は滅亡／再生テーマとは接続しないという性質である。飢饉モチーフは津波などとともに神々と人間の問題、つまり自然災害として位置づけられている。このように飢饉モチーフとの比較においても、疱瘡の異質性があぶりだされることになる。疱瘡はやはり、純然たる自然災害とは位置づけられていないことがわかるのである。

(8)　疱瘡という難題

以上の分析の結果、以下のように図式化できる。

嫉妬‐トパットゥミ：人間的災厄、滅亡／再生テーマに接続

飢饉：自然災害、滅亡／再生テーマに接続しない

疱瘡：神による災厄（自然災害)、滅亡／再生テーマに接続

神であって人間を滅ぼす疱瘡神は、アイヌ口承文学のなかでも極めて特異な存在であることは既に指摘したが、そのような位置づけは、モチーフ間関係をたどることによって、さらに明らかとなる。神が人間を理由もなく滅ぼす、という不条理を、アイヌ口承文学は疱瘡モチーフに、人間的な災厄（人間社会の問題）と自然災害（人間と神々の関係の問題）という両方の性質を与える事によって表している。と同時に、疱瘡は、嫉妬‐トパットゥミ・グループや飢饉などの自然災害グループの、いずれのグループとの関係においても一定のずれをみせていて、このことから疱瘡が、説明の困難な現象として概念化されていることがわかる。このような概念化を通して、かつてのアイヌが疱瘡という病を、いかに自

らの認識論のなかに位置付けようとしたかの努力のあとがみえてくる。

(9)　歴史学的知識としての疱瘡

疱瘡の以上のような絶妙な概念化は、アイヌ社会における疱瘡流行についての歴史学的知識と対比すると、一層意義深く感じられる。歴史学的には、疱瘡は和人によってもたらされた病であるとされ、和人に対するアイヌの脆弱さを象徴するモチーフとして機能してきたといえる（高倉 1976、菊池 2002、ウォーカー2007、香西 2009 など）。

アイヌ口承文学における疱瘡神は確かに船団に乗って現れたり、鳥の群れといった形で表されたりするのであって（久保寺、知里 1940）、もともとアイヌ社会に存在せず、海の向こうから訪れるものとされているのだが、疱瘡神は和人の姿をしているわけではないし、疱瘡神は和人の国へも「稼ぎ」に行く（平賀エテノア、前掲）。疱瘡は和人によってもたらされるものとも、和人がコントロールできるものともみなされてはいない。

疱瘡モチーフは自然災害的性格と人間による災厄の性格を兼ね備えており、アイヌ口承文学は、この病が純然たる自然災害ではなく、人間が媒介する災厄であるという性質を暗に与えているようにみえる。しかし、病は神によってもたらされるのであって、和人がもたらすものではない、とされている点は重要である。このような概念化のあり方を前にすると、この病を安易に政治的力学のメタファーにしてしまう歴史学的理性がいかにも貧困なものにみえてくる。

(10)　「はじまり」としての「滅び」

村の滅亡／再生というテーマとの接続の有無は、単に疱瘡やトパットゥミが人間を滅ぼし、飢饉や津波が人を滅ぼさないという、単なる滅びの原因論を示しているのではないだろう。津波や飢饉によって村が滅びる事例は少数ではあるが存在する（例えば岩山ヨネ「蝉の自叙」久保寺 1977：177-178）。このテーマは、人間が人間を滅ぼすという人間社会の不条理を暗示していると同時に「人間の村は再生する（＝滅びない）」という命題を提示している。

このテーマは冒頭で触れたとおり、人間の世の始まりを語るアイヌラックルの神話に最もシンプルな形で表れている。村の滅亡／再生の物語はただ一人の生き残りを主人公とする物語であるが、これはアイヌラックルが孤児であることとも重なり合う。主人公が孤児であるというモチーフは、英雄叙事詩の英雄にも共通しており、アイヌ口承文学におけるジャンルをこえた普遍的モチーフのひとつである。

滅亡／再生テーマの物語群において、村の滅亡は物語の前提条件である。物語は主人公の少年、少女が孤児であるところからはじまり、やがて素性が明かされ、両親の村を再生して締めくくられる。つまり「滅亡」は物語のはじまりである。主人公の孤児が実は高貴な出自をもつことが明らかになるという展開は、滅亡／再生テーマとともに、またはそれ以上にアイヌ口承文学において馴染み深いモチーフであり、孤児／英雄という良く知られたモチーフ間関係によって、聞き手は物語の冒頭で、すでに滅亡／再生というテーマを予感する。つまり、物語が始まると同時に滅亡と同時に再生が予感されているのであり、滅亡のなかに既に再生は含みこまれている。

(11)　おわりに

頻出モチーフの抽出とモチーフ間関係を通して、多数の物語を重層的に読むことで、個々のモチーフがどのような概念を帯びているのかを分析することができる。このような作業の積み重ねによって、アイヌ口承文学のモチーフが、単純であるどころか、いかにニュアンスにとんだ概念操作を行っているかを読み取ることができる。ひとつのモチーフは多数のモチーフと接続しており、幾重にも重なるモチーフのネットワークの中で物語は奥行と厚みを増していく。一つの物語には数多の物語からなる背景がある。このようにしてモチーフの概念を丹念に検討することを通して、アイヌ口承文学が、その一見シンプルな見かけとは裏腹に、きわめて繊細で奥行ある世界を内包していることが明らかになるだろう。

参照文献

アイヌ無形文化伝承保存会編 1983『アイヌの民話』
金田一京助 1993『金田一京助全集』8、三省堂
久保寺逸彦 1977『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店
久保寺逸彦・知里真志保 1940「アイヌの疱瘡神『パコロ・カムイ』に就いて」『人類学雑誌』55 巻 3・4 号
田村すず子編 2001『アイヌ語沙流方言の音声資料１：近藤鏡二郎の録音テープに遺されたワテケさんの神謡』大阪学院大学情報学部。
高倉新一郎 1972『新版アイヌ政策史』三一書房
菊池勇夫 2002「疱瘡流行とアイヌ社会：一九世紀前期の人命喪失と蝦夷地開発」『歴史科学』171：1-11
ウォーカー、ブレット 2007　秋月俊幸訳『蝦夷地の征服 1590-1800：日本の領土拡張にみる生態学と文化』北海道大学図書刊行会
香西豊子 2009「アイヌはなぜ『山に逃げた』か？：幕末蝦夷地における『我が国最初の強制種痘』の奥行」、『思想』1017：78-101
Foley, John Miles. 1991. *Immanent Art: From Structure to Meaning in Traditional Oral Epic*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①坂田美奈子、トゥクピタの首長の物語：アイヌ・エスノヒストリーを創造する、北海道東北史研究、査読有、7、2011、pp.11-24

〔学会発表〕（計３件）
① Minako Sakata, Refiguring Indigenous History: Through Ainu Stories of Village Regeneration, Uppsala Third Supradisciplinary Feminist Technoscience Symposium, 2013.10.18. Uppsala (Sweden)

②坂田美奈子、アイヌ口承文学の認識論：疱瘡モチーフの物語を通して考えるアイヌ・エスノヒストリー、日本社会教育学会六月集会、2013.6.9、筑波大学（茨城県・つくば市）

③坂田美奈子、村の再生の神話：アイヌ-エスノヒストリーの物語枠組を考える、国立民族学博物館国際シンポジウム「温故知新：アイヌ文化研究の可能性を求めて」2011.11.1、国立民族学博物館（大阪府・吹田市）

〔図書〕（計２件）
①坂田美奈子、御茶の水書房、アイヌ口承文学の認識論：歴史の方法としてのアイヌ散文説話、2011、227

②Minako Sakata. Historical Consciousness in Ainu Oral Tradition: Perspectives on How to Perform Research With and For the Ainu People in Japan. The Hugo Valentin Centre, Uppsala University. RE-Mindings: Co-Constituting Indigenous / Academic / Artistic Knowledges. 2014. pp. 121-130.

６．研究組織
(1)研究代表者
坂田　美奈子（SAKATA, Minako）
東京大学・大学院総合文化研究科・教務補佐員
研究者番号：30573109